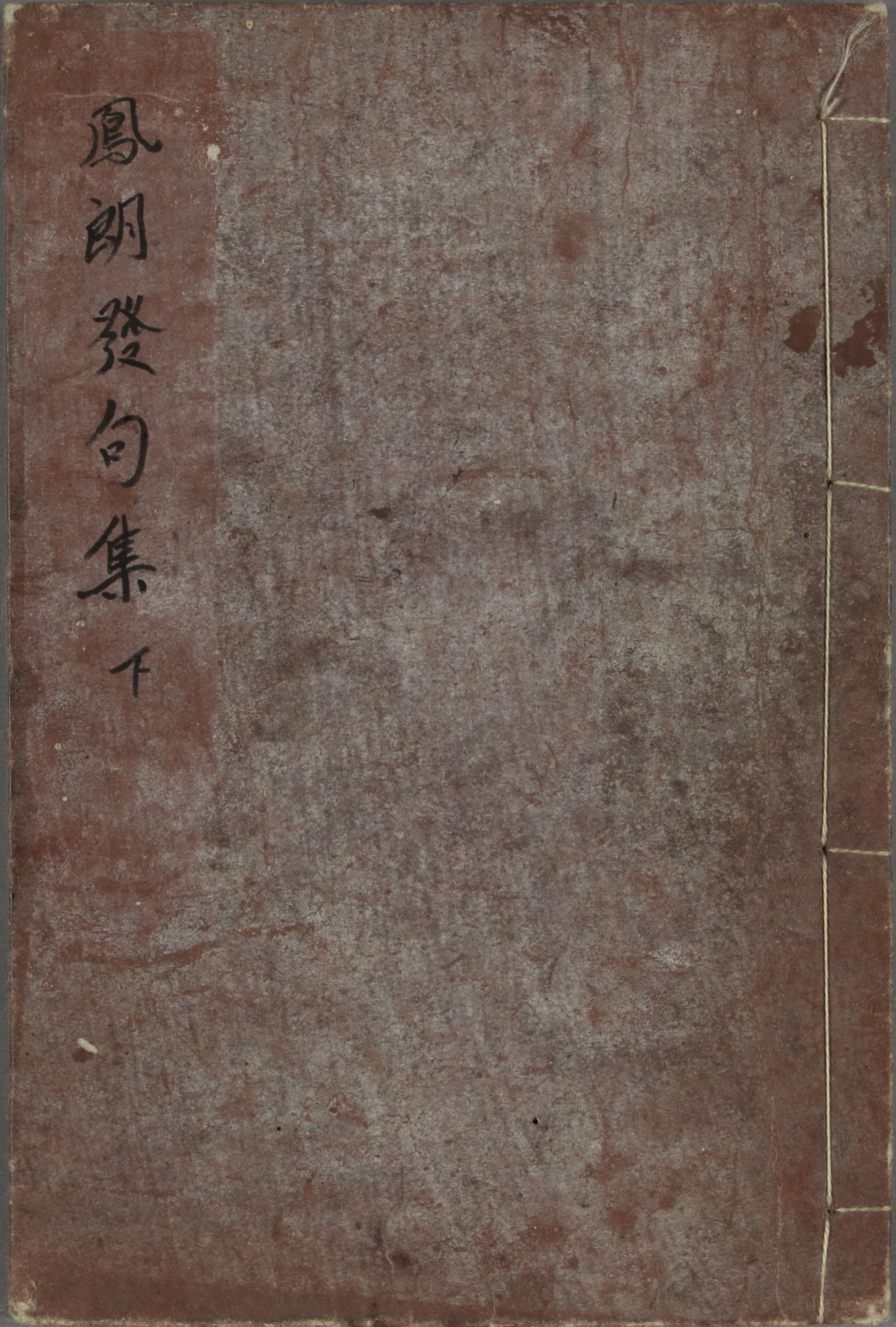


鳳朗發句集 下



鳳朗發句集下

秋の部

立秋

為妙しハ秋也暑のら立吾めぬ  
秋立やまき中よりこもてかーつ  
あ代乃秋ハ立なり日のたつ  
心のりもろく秋乃まよなり  
菴取てるきハ秋のらんら那

初秋



冬に手反らるる日ハ丁度水も  
自噴りし為れり鴨あし  
と記す

初秋や初霜降りて見出たり  
宵初と来て初秋と来り  
しら秋やたし近付の空も  
初秋より夕のきて泡の流れり  
秋果  
冬初秋よりうらうらと

稲妻 秋妻

稲妻よりとらるる瀬戸の粒  
稲妻やまより珠をくさるる  
甲州の村の西より白瀬  
蒼蒼は地は遊ひていきなり  
氷柱消てハ流津魚  
某の家ハ秘蔵はるる  
いさむひの稲妻のけすや  
稲妻の不定のねむり

すれあふやそよよもす秋の聲

七ツ 五川

棚をこや道はくちへ程の巻

羈旅

柳をこや弓かほそい魚を引

・ 萩中よも見つゝちひさし星の空

星を散れぬよふつきや男の

事なけし雲のこもる如きの川

るをかきし玉織りかたや

月のせき山さへ見えぬ 坂河

魂棚 魂祭

・ 魂棚とのこ見てるは月より如

うとあるき成あつて玉をふり

・ 魂の吐きし 露はもらせ 露ひきり

燈籠 孝市

・ 簾を望む向言し 燈籠の影

めくらすせはとそむひのく切花の

・ 中らるし 燈籠ちらるし孝市の市

施條鬼

七月十五日若原の御より伊豆の

屋敷一きう浦との限り浪打障子

あやまり庭の藤屑を束し命

紙を甲ふくし澄純條鬼の事

すゝ成りて

施條鬼火や不二坂厚巾よ駿河濱

涌

くらりのくし体よよ這入をこり外

水の香踊ふあそび衣里今

踊子や魚目よ今より書よ今

扇周扇置

飾列

扇より二日もよき別柱うね

控際もたててたえおと扇置

露

白露の采はとわろをかりあり

光のつらき一層あり二層の中

的右の一色ふるまふよきあふと

告来しとちあつたあつた

あふたふしとちあつたあつた

秋日 秋夜

あつたあつたあつたあつた

秋の夜あつたあつたあつた

秋風

月さ日の向ふしとちあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

源の互敷波よとちあつたあつた

よとちあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

秋水

冷

・ 風の竹吹際より涼し秋の水

檻の原より大井川を望みて

鳥飛びよ空のたゞえて秋の空

方いぬき紙のまう愛なき

冷津くや路の下の旅の垢

相一葉

・ 出舟のちとて推し相一葉

たぐまわてる水ゆらぬ一葉うね

散柳

・ 秋中よ采きしちなりちる柳

木槿

良をゆめる心さしちりてをさる

木槿帯りえし吾あいのしる

めりしちるふ

かえり家やちとつらさるる木槿

つらたえく木と采きしちるけり

花を揺くさる木槿うね

箱

海折(か)ま

苗取て夜よハ菜根多箱の露

船魚

薺の船て舟い。もせきりなり

船を不やいふ船見ても喉をこり

あさ魚の葉おりのりや舌の側

船の舟はなままふ不そり船まを危

活ありの秘りそ人の結ん

名号(なごう)

薺の水揚て喉て舌おにり

船を不やおりの葉てハ喉たらん

藤袴

山(やま)をせりつので舌や藤をうま

めり(めり)

舌りても舌り折たーめり舌

おろくそ舌や舌をさあー

舌そ舌の舌ひ舌黄たうめり舌



芒

澤山なる心地はせぬやめ良き  
自より立ぬ善なる人なり娘都志  
うらやまの糸病のともをせらる那  
夜はもとの通よりよ掛ふすき成  
夜はれはぬのりり合ぬき成  
二見法浦ふて  
おきけい解り得るすき成の種  
おの秘蔵よふりきなるやよ

萩

あふんを破れ橋をたこりたれと  
系も人もたれをひたりき成  
又君の代のころけき成ひら  
おらんう  
ゆりすきやすきなりうらさ成  
おのの糸のきえてかたすき成  
日影の糸よりさあつゆこの那  
もてしと糸を起す如極の萩

採題より高層まで不残にて

るを去帳より定手入てあり萩の白

ひそせ余りの松よりま留ま

くわら岩のまをたやうり草

一系おれまきよりたれ心よく

そ遠のつをききやすむ

萩のまより株もたうらに萩の萩

### 萩 萩麦

七月の松樹の浦邊より萩をす

・ 赤らぬ火やまのつ消ても萩のま  
かろのや、病もして、見らこのらに

### 桔梗

・ 提より桔梗のるまへひき水  
白いのう、つと見らる桔梗の如  
巾的て見らる桔梗の答の角

### 萩花

中程のあら見てもたう萩の花  
その花跡を見れば、ささうき

● 草花を折よこの種ハをちちの

芭蕉

● 親の茶の傘おろしにせ成水

系瓜 秋茄子

りり つ種し 臨すもせぬ系瓜茶

つちひんよちせすうなり秋茄子

番椒

● 唐からーまるーきさハちのうなり

ちちつけよち潤さを産唐からー

蟋蟀

折しハまるハれもちのけ茶

傾けハ香の目よちきりし

鳴うちハかつて臨れ蟋蟀

長鳴のすきりよちぬきりし

松年四ふ竹をさうて一弦をすま

さましりの和歌をよ曲名をよ

のーて深せらるる音漸くして

笛瑟なるものありーつる

秋標

涼しき琴の裏に名更せきりしに

秋標欄

子のいづこよるれて志いらく

子睡す深より袖へ人來りて

蕉のの像成るふ國出來て

秋標欄

高水きまんとすう時夢さあさう  
町ありとくやハ夢よそ秋の様  
標よりふせこ欄より成るなり

秋の標や故うもまき一は片可つ

ぬれきこし舟もの降ふらひ葉の成

田

己の秋ききとも志らぬ子の略  
立酌の引張一なるはきこりぬ

鶉 鶉

・受てハ折らんまゝのね鶉の音  
二聲の鶉ノ引りやあゝ素

菰

・菰ノ指さけりよよ葉の層とこの音  
立菰ノ一軒の序は二のりなり  
・空さすふ立の折りなり菰の音  
麻衣もや々々と修る口の下  
立流や菰ノひとむらむの種

・ウコケリ苗も一度菰の音

磯山子りのさけ麻乃修ひなり

治れり世代のあつるはハ

菰ノや傘きいて下結をいで

葉山子 鶉子

・々立さかーもあるゆふの那

きさけしそなりりあさけ鳴り成

引もつこもつりよ強くちる子素

ハ 鶉 鶉

ハ朝ハらふまきの少れ梅の花

初月

初月や藪より花をよみ極ぬけ

待宵

あはれその名月すめりあのを宵

夕日の月

あはれ夕日すめりあのを宵

あはれ夕日すめりあのを宵

あはれ夕日すめりあのを宵

名月

名月すめりあのを宵

名月すめりあのを宵

名月の枝よりすめりあのを宵

名月すめりあのを宵

名月すめりあのを宵

名月すめりあのを宵

名月すめりあのを宵

名月すめりあのを宵

魚形村浪あたりとひはしの  
やうに城賊せらるうきう

名目や玉あつたの種の後より  
あつた月、秋をよらさぬおきうきう

名目両

名目やるの種はあつたよきう  
るの甲、名目一寸とむれきう  
名目たるきうたふひたきうきう

秋月

ちりあつた種あつてきて秋の月  
おとろくや秋もあつた秋の月  
一秋の十五夜あつた秋の月

仲秋世目

耳、産やまのきうはつた秋の月  
晴をすらたの、とて来ぬ目たる

目

すきうを極きうたきうきう  
夕汐よ向きとてきうきう

待て候あすより一帯のせく目見式

仲林の清光を遊ばしんん

ちきとをよちうり

見ゆさんんよもかくと語るはらと

新目

杖のうせて杖のま籠を木のり式  
目を結よひ指ひきり四つの海

阿庵

小車や巡りきりせて目より遊

川原うよ竹を釣目のねんこの那

うれりさきりうらぬ水くむ目ねん式

換部一ちへ取次目の、夕紙茶

見るとたると見を居る目のかきき危

隣りても目の漏るゝ居るうらな

一、あ子を操む

素うりや花ぬの目めめ石人

十六夜

いさよあ我結いりまなす一結の目



十の程やくら—とよ六のりまの  
いさぢや待て日嘗てよか—交  
十の程のるまの題—  
くらきまのいさぢあり傘の下

星月夜

雪層城の夜—と結の句  
せよとつや—

星をかり出ても雪程はたうら  
ものいそぬ神典うつ—也星月夜

長夜

夜を

さむしろよをれいのいそ程を  
なまの甲よ耳ハツえを夜の長き  
よきと真まあまの夜をきか  
かけろふのまよとわら夜をう那  
夜をさや鳴—てやな納屋の鎖  
人聲は交の志書ぬ夜をう那  
獨りむと夜をきかた—互位の聲

何そこらこむれくやうを救ふて  
聖分

・能々の増したるを聖分への  
安やうくへり目のせ居る聖分

秋夕

十重せ重望のくうに秋乃書  
やう回ハやうとことて秋の夕  
秋のくれきのやれ息もあはれ  
輝と点見名せて秋のくれ

砧新酒

秋の書あまりの争て苦もせは  
揺りのくらのなれ秋のくれ  
ゆる書の流てぬけりきぬさう  
いら書り陰日向ある砧の  
ちりめうらぬ振て見る新酒

落木

心けを見れはさうな落木  
千川迄きぬにあり落木

木屏

七峰宮舎

木屏や葎のまゝの通ふ

柿梨

回所聖堂の作りまゝ

位を記すあり柿梨の

やうなとおもひ合す

柿の木や岩のまゝの

人の来て語れに柿梨の

蕎麦 松茸

唐下の子おちり見せし

こも蕎麦の初を

文科を隣り白くをけの

焚燗くまゝのまゝや蕎麦の

松茸やけりてまゝに

ろ 渡り

まつろのよき

つらなりおきて

菜

乃ちまや訪ふくも初歌の浦  
戸の末て志事や心室の書さ菜  
と来とも心と心けちりぬるま  
海つそあて鳴やまのふれ玉は石  
於りくそ歌の道言や渡り骨  
朝日ハキウおもせきとも菜の花  
菜見よや驚かさけ九々の那  
菜の花志つめ珠さ一塔り式

菜花さきのふしちる白ひきり  
年久一田一株のら菜の花  
玉崎や古松の年のきくの花  
春の言き菜化りまう松花露  
お毛人旅報  
硝子の障ふもやうきくの花  
夫と菜と一のこ菜化て菜とる

后月

後の月心細きく一足の一ね

青空の押えて居るや後の月  
等深におもひの後の月  
沈みゆく古くも昔も此の月

木母ちる茶店

此末の名 誰も知らぬや後の月

河迂宮

文政五年九月神尾の  
伊勢より旅立ちて

河迂宮 只と書き流宮この如

太くや蒼人 夢城からうき

紅葉

道よりて 赤らぬ紅葉の如  
友よりて 赤らぬ紅葉の如  
葉もくりに 赤らぬ紅葉の如  
赤らぬ紅葉の如  
赤らぬ紅葉の如  
赤らぬ紅葉の如

戸隠山下

橋の名も 赤らぬ紅葉の如

やまを好まぬ由館の人を和坊

ましく旅送るし〜多きをう〜

た〜たる心〜りた〜て

見〜る〜し〜あま〜る〜名跡の即景式

祖〜あつ〜る〜舞を〜か〜こ〜ま〜り〜て

神の戸は海を時をり野ハ錦

未枯

うら枯や布施の魚買小商人

未枯や京成と千代〜東山

行秋

行秋の夕や〜来ても秋の〜を

行秋やひ〜り〜露種の〜幾回〜り

秋名跡風煙名跡

病中

う〜き〜林の〜音〜さ〜急〜ふ〜れ〜名跡〜

春望屋名跡を訪せ給ひ

名跡

沸音の対る風煙の名跡

九月夜

きりけりや大松畑の九月夜

詞詠

咲き成社の潤めて四丁

むらうしやうなまなくどちのさき

虫の聲の庭うあまきつゆあり

まをるの二つ交うちりて雲よのさき

さよのさやうけゆねをまよひに

せりもてまやしてまをるを呼

くしめたるをきりしき

望をきりし秋のさき

おけりし見交すりし九月

雛弓や板すもさける秋のさき

天目山松古

水音やけりし秋のさきの果

戸鴨の来ぬ出づらの森は素

賀

戸鴨の来ぬ出づらの森は素

冬の部

初冬

この冬の山／＼回一高き／＼

神々目

多／＼ものわりの書をくわし神々目

赤／＼雪礫山元て神々目

小春

雫のけりまをるや小春のきり／＼

狼狽子を殺す、少くもる／＼



冬日 冬海

冬の日もまじく白米のゆきこり  
蒼うしても枯ぬけてゆく冬の間

冬日

ゆき猪や嵐の菜もゆきこり  
瘧疾并に秋のうらみと冬のあか

初時雨

空のたけきまのなまむらこ  
ゆき残すけししと初時雨

日のあけし言ふことぞ  
素心し存分降りぬと初時雨  
なろうしき又あけし初し

時雨會

冬の日もまじく白米のゆきこり  
小夜の中ゆき

暮れしと石も今日泣きし初時雨

時雨

降りぬ日の初時雨

分ちり何ふもやうに時をよがし  
起する百くき終へし時を  
志久れ川をそのはたきよ曲り  
時をするふとわらもあはゆる  
正しむてハ甲斐なき時を  
志つしと来さのりぬるしと終  
東麓古城松書ちと古園と題す  
うさかみむしう時を一月の松  
時を會

うさ、ひて 礎をらゆらしと  
深川の是 葉 時を

花本太の神贊

木枯

たへて 甚むるまなき神の時を  
風や大和の地もそまわり  
木枯の水海くち 雲きこの都  
根つよく木からしとニよみなり

冬目

字

山伏——並み響いなり——冬の月  
大灘よはる中のあり冬の月  
冬の月空なき空よやまなり  
象眉の目——うらみはる月  
——うらみものよううらみなき象  
空よめもなきこらゆるちりりり  
うらみうらみして響もあてらきぬらり  
うらみやとけぬ空なき空のちりり

枯野

いそぬりもたてて響きなき象  
阿まうらみりもはる空この野  
志おしうれぬ空なき象も先も響  
口阿も響てもはる空の空なき  
響りして居るや枯野のむらむら  
物志きり——白くしてはる枯野系  
象はる空なき象もたてて枯野の  
うらみさす枯野の空なき象

わさのほとと 躑もさす 枯野原  
冬籠 冬構

わさのふをを やまよ 冬籠  
一をいり 日のさす 冬籠を  
冬籠のふをを 冬籠を  
わさのふをを

冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを

火桶 火鉢

冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを

炭

冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを  
冬籠のふをを

楯

楯を垂て二本を片うし楯本は  
ひる柱をさう八つりする楯本あり

藩園

爪をて裾をこむやうふこし  
ぬふも背に懐もあふふこし  
出する者おとさうやこむ藩園外  
救方の物見をこさうふこし

納豆

却のち粒をうゆは納豆のち  
塩味ふけて納豆うつや一不

鞆

鞆とすけ力を旅に旅ふり

十夜活取越

炭つくりりや十粒の人のち  
秋粒りー内容のちり活取越

夷探

之は活の積

霽

海原残雪不<sub>レ</sub><sub>レ</sub> 一<sub>レ</sub> 之<sub>レ</sub> 以<sub>レ</sub> 採

初<sub>レ</sub> 雪<sub>一</sub> つ<sub>レ</sub> 槌<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> き<sub>一</sub> や<sub>一</sub> 新<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 霽  
瓢<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 音<sub>一</sub> 霽<sub>一</sub> 取<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり  
を<sub>レ</sub> 不<sub>レ</sub> と<sub>レ</sub> 阿<sub>一</sub> 毛<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 一<sub>レ</sub> 片<sub>一</sub> 霽<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 鐘  
霽<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 音<sub>一</sub> 廿<sub>一</sub> 九<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり

霽

傘<sub>一</sub> さ<sub>一</sub> して<sub>レ</sub> 雪<sub>一</sub> や<sub>一</sub> 飯<sub>一</sub> さ<sub>一</sub> ぐ<sub>一</sub> 夕<sub>一</sub> 霽  
さ<sub>一</sub> り<sub>一</sub> くと<sub>レ</sub> 意<sub>一</sub> よ<sub>一</sub> 也<sub>一</sub> 霽<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり

雪

初<sub>レ</sub> 雪<sub>一</sub> と<sub>レ</sub> 又<sub>一</sub> 雪<sub>一</sub> つ<sub>レ</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり  
を<sub>レ</sub> 門<sub>一</sub> 雪<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 降<sub>一</sub> て<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり  
初<sub>レ</sub> 雪<sub>一</sub> や<sub>一</sub> ち<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり 小<sub>一</sub> 風<sub>一</sub> を<sub>レ</sub> 吹<sub>一</sub>

豊<sub>一</sub> 見<sub>一</sub> 城<sub>一</sub> 王<sub>一</sub> 子<sub>一</sub> 末<sub>一</sub> 音<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり

雪<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり 霽<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり

初<sub>レ</sub> 雪<sub>一</sub> や<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub> 二<sub>一</sub> て<sub>レ</sub> 也<sub>一</sub> 守<sub>一</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり  
積<sub>一</sub> り<sub>一</sub> 雪<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 降<sub>一</sub> たり 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり  
阿<sub>一</sub> 毛<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり 雪<sub>一</sub> の<sub>レ</sub> 心<sub>一</sub> 出<sub>一</sub> たり

二日詠といふや袖生の雪の山  
ほちくそ雪うつ雪の帯うめ  
雪はう（系て見れば）糸らきり  
雪の中は雪見付しうひつ松  
詠二里先（三）里や雪のさる  
けきけちましく門は雪の詠め哉  
むつは、やむらうちなり雪の家  
起さる詠の飯もてぬや雪はを  
雪の人け雪雪うりよ見ゆらなり

朗詠

雪子の眼苗や雪の春能ち  
大雪はつと強（き）り飯のうち  
ないうちやうよ来てつふ深雪  
阿うらさきり（）の生そり深雪哉

病中

あつて雪もつるも春ぬ日春  
よあやよ屋うら見申能雪  
氷見て雪をぬえり（）

氷

結荷もなき越の沙所も氷の如

揉

揉やめ子のけいこく

煎茶

よる見えにちる煎茶もあま煎茶

ちるちるらつそりめいもみち

茶もまじり煎茶のちる煎茶

煎茶

一日古酒にて居北もく煎茶の如

神事も色く煎の煎茶も煎

東幻唯尾

名の青い煎茶とひらもなき煎茶

煎茶のぬけぬもつ煎茶煎茶

煎すのらや煎茶の煎茶もか

煎茶

この煎茶も煎茶を煎煎茶

煎茶の煎茶も煎煎茶煎



木茶

みち木の茶系茶系りこよわうりまきり

茶門茶月形茶門ひらき茶系

うさものよそて送る

たれをや木の茶系のもよまらる

復也

之を茶を茶系りて送る

たのま茶系茶系ひらき

祖の茶系茶系りて神舞を

送りもろりて茶系茶系の茶

送り茶系茶系りて茶系の茶

茶の茶系りて茶系

送り茶系茶系りて茶系

枯柳

のらぬ枝ハ茶系りて茶系

枯柳茶系りて茶系

枯茶系りて茶系

冬柳茶系

恙ぢや梅見ぬ里れそのの梅  
冬の梅哉理くさまあておよき

贈高本先生

土人よ先一枝や冬のうめ  
日の芽や梅葉のひきをきり  
冬梅のゆめの事とおもひきり

枯尾花

かひくこーき白紅なり枯尾を  
おひきて研てはるぬ枯尾を

芭蕉忌

夢を種く 残して枯尾を  
鎌倉よりうき道のり

川角うらまきお梅なり枯尾を

枯葉枯葉枯葉

白葉やおめにおえき枯葉  
野の冬を枯つての葉  
春うらまきお梅なり枯葉

水仙

水仙の字きこりきりきり  
根何やま水仙下留  
水仙や挿出る葉も  
水仙や好ぬものよもつけ  
大根引

千鳥の園おのりや大根引

啼やむし根一程うら千鳥う那  
習て居る態うなうふふ鳥引

やてきし居社に根ゆるふ鳥引  
先一の本て種となる千鳥引  
ふ鳥引く家も三の四ツ身引  
ちりるらと居るきりや川ふ鳥

水鳥

水鳥の響は口や、軒家  
水鳥や兵士一鳥もせは

鴨

鴨の音く聲うより千の自根引

云付の近頃の来ぬや鴨の聲  
啼きや鴨鳴方の北ら——き  
見さよりわね山階——鴨の聲  
小一門多き声も鴨の聲  
鳴ぬ鴨をとりてつる門田武  
病床相り佳

鴛鴦

そ——の御音志のひやうもなかり

折——や峰近所の鴨の聲

鶺鴒

あそ——の歌きれ鴛鴦に横方一の那

尾の音は既ぬきをみそき  
こもくしにけさやうもなかりぬ  
おおそれ——てきけり——やまをさこい

木兎

木兎中て途て来る木兎鳴き  
木兎や的うい方の歌の表

河縁生海流

河縁さけるはれもまじく  
むつそれと一分も延ぬ生海蔵素

杜父魚

杜父魚の尾すき糸糸の級や空をのめ

綱代

か之下と一糸量如綱代より那

夜真引

吐すもわ手品もつるや夜真引

冬玉

け水のゆきまきりせて冬玉より那  
得て居て忘きをるもや冬玉のり

神楽 湯火焼

久らりる紙面の見て居る神楽  
そりそりあすはもろをたふ神楽  
湯火焚や鎌倉山ハ星 月 夜

顔見世

顔見せやまききぬものハ玉の川

神押

をち考ふき先似て見し程をさこころき  
車如く纏ひし絆巾の事りなハ

絆たき池を廻らば案内せし

鷹  
鳴

區くや鷹の口和を新の音

鷹あまを雪の袂と来りし

鳴叫ひや海一吹込む星の

暖  
鳥

やまをりやこころ来まの暖鳥

並くくし新餅指ひぬぬくりの

寒  
入  
空  
月

家並し精進するや空の入

空月や危下むらふ御屋の門

空月の極付もせぬすき

空  
梅

寒梅やをきわなつきとよむ

志病快然

空梅や雪割ちらぬ枝ちり

乳鮭

阿走

乳鮭の塩引やうな味口こう那

下駄の歯を蹴りて度る阿走う那  
る二日阿走の宵茶まうけう

昔季佐

昔季佐れうくまはんそそ殊縁こ

大千を界中たご大助舎うそ

日本の武府第二下佐久ミヤ

なまよもさるるりん

昔季佐や隅田流しとも二之杯

煤掃餅搥

煤掃て休て考の掃除こう那

形のよき餅をのたをき道茶

大黒の槌あうとさうり

漬込

やよ指一葉かん橙季の餅

来ぬ答りは似きよなうぬ餅の札

豆打挿枝

豆うちや初年一巻ハ候をらん  
久らるる候おちや豆をうらちり  
よさハハヤ蒲団の下に鬼の豆  
さー於て理りー枯葉と葉をり

年忘

壁さーの薪をりー年忘を  
顔よりならやあらはと  
年を先何と急うぬ忘をり

如是候まで尚也

梅もとらん年を忘をり見ゆるなり

年市年取

ふと買て世間を旅や年の市

庵中

不ちるももつらに年取をり生か

門松学

松土雲のまけりー勝ぬ庵の門  
年取



年の暮に夜更の月もたそきて  
手のむら紙をきて休めて年の暮  
志波の月日一瞬もたらは

一跨、年の暮のらちのこれ

朗詠

権檀也えり跡さきも枯もせは  
梅占も待課せきり、年のうら

雑

頂の白帝きいん登ふたのゆ

ちの空のとうまをさうふもたふ  
松島山やら、話さく事ら、夢、たたら  
そ、たらのたえら、見ら、ま、と佐の海

細山

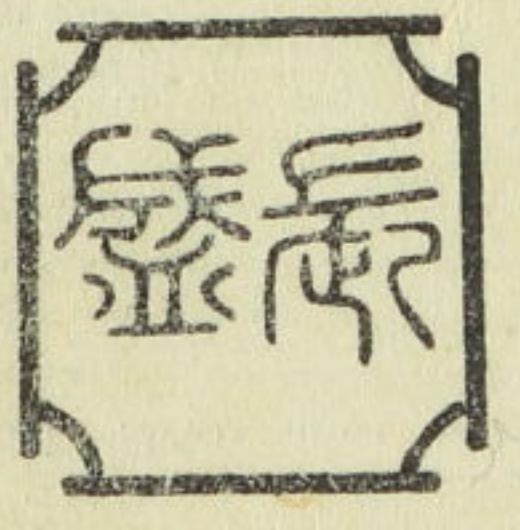
棧也雲も 権乃りお、ま

風流を河に追母桃梅の  
崎人より其行跡に象  
浮慮より多し  
精神はまは社の母とある  
世をたがひて社に似

自然の彩高凡明乃  
見るべき成るなり一  
耳一此中をよるは  
志めおきあらさるなり  
尤もその理たる月の

光ると海は乃白ひび  
五七五ふたふたは  
ものたるなり

後持院権僧正格者



尾形海山齋書

惺庵西馬編

可布庵逸淵

梨雲舍雀翁

即事庵詠又

合 校

惺庵西馬先生著述校合俳書目錄

七部集連句早見 折本 刻成

自然堂獨吟千句 全二冊 再梓

鳳朗發句集 小冊 刻成

全 右の海の  
佳句を輯す 後編 近刻

去來 伊勢 紀行 合本一冊 刻成

江戸書林

日本橋通十軒店

文苑閣

播磨屋勝五郎

